

KITA

ニュース

NO.51号
July 2019

目次

- 2頁 理事長あいさつ
- 3頁 2018年度事業報告・2019年度事業計画
- 4頁 2018年度JICA受入れ研修コース実績
- 5頁 2018年度下期実施の研修コース
- 7頁 帰国研修員の活躍紹介
- 8頁 海外活動状況
- 10頁 KME活動紹介、国際親善
- 11頁 KITA OBの近況便り
- 12頁 下水道維持管理コースについて(パートI)



廃棄物管理公社 Vice CEO Dr. Pauze、JICAマレーシア府川所長、
楽しい(株)松尾社長の3名によるMM調印式



カメルーンハイランドの農園調査風景

～ 堆肥化事業をビジネスとして取り組む「普及・実証・ビジネス化事業」が採択～ ＝マレーシア/カメルーンハイランド＝

マレーシア国カメルーンハイランドでの堆肥化事業をビジネスとして取り組む「普及・実証・ビジネス化事業」が採択されました。楽しい(株)、北九州市、KITAは、マーケットやホテルから出る日量2トンの食品系廃棄物の堆肥化事業の実証事業を2019年7月より約3年間をかけて実施します。

詳細は本文(9頁)を参照下さい。

理事長挨拶

— 2018年度事業報告・2019年度事業計画に際し —

北九州国際技術協力協会
理事長 古野 英樹

5月1日より元号が平成から令和に変わりました。振返れば平成元年、1989年は日経平均株価が38,915円の最高値を記録後、ベルリンの壁崩壊、バブル崩壊等大きな変化があった年でした。そして今、令和元年の環境を見ると、日経平均株価は22,000円台、対ドル

円レートは110円台と安定しているものの、米中貿易摩擦、英国のEU離脱問題、北朝鮮核問題、イラン経済制裁問題等大きなリスクを抱えた年となっています。海外との関係の深い当協会にとっても更に厳しく、不安定な環境が継続することが予想されています。

このような環境の中、KITAの2018年度の評価損益調整前の経常増減額は101万円の黒字予算に対し847万円の赤字決算となりました。これは、2017年度実績の1,316万円の赤字に比べ500万円弱の改善ですが、2年連続の赤字という残念な結果です。当協会としても、皆様方のご協力により種々の施策やコスト削減を実施し、収支改善に努めましたが、当法人の主要事業である研修事業が、種々の努力にもかかわらず平均コース日数減等の影響により収支に悪影響を与えました。また、技術協力事業では2018年度の新規大型案件として計画をしていたフィリピンとカンボジアの廃棄物案件が翌年にずれ込み大幅な事業収入の減少となりました。2018年度は上記のように収支上では2年連続の赤字という苦しい結果を残すことになりましたが、これからのKITA経営の安定及び充実のため下記のような施策を講じ将来に備えた1年でありました。

＜研修事業＞

1. 研修の更なる充実
2. 新たな研修コース受注に向けた仕組みの構築

研修の更なる充実に関しては、コースリーダー、受入企業、講師の皆様のご協力により研修の多様化が進んでいます。また新たな研修コース受注については特に研修フォローアップの事業化を実現すべく準備を始めました。

＜技術協力事業＞

1. 公益目的事業の継続推進
2. 北九州中小企業のグローバル展開支援
3. アジア低炭素化センターとの連携
4. メンテナンス研修事業の強化:

北九州メンテナンス技術研究会(KME)の活用
公益目的事業の推進は順調に進んでいます。また北九州中小企業に対するコンサルティング事業が拡充を目指しています。コンサルティング事業は今後のKITAの目玉のひとつになることが期待されるものです。

さて、2019年度ですが、研修事業は研修コース数が2018年度実績より更に3コース減少しますが、技術協力部の大型事業案件が入る等の追風、自助努力によるコスト削減効果もあり約80万円の黒字予算となりました。KITAの2019年度の事業方針は、2018年度方針をほぼ継続し以下の3本柱としています。

1. KITAブランド実現に向けた事業力強化・充実
2. 事業運営効率化の一層の推進
3. 公益財団法人運営の確立・透明性・公正性及び情報公開の徹底

一つ目の柱の研修事業では、研修フォローアップ事業化の実現を目指し強力に推進していきます。また技術協力事業では、北九州市環境局、環境調査研修所との連携による国際協力・技術協力の推進、市内企業の海外ビジネス展開に対する積極支援を中心に取り組んでいきます。

二つ目の柱はKITAの将来の安定した運営を目指し、管理業務効率化とコスト抑制に取り組んでいきます。

三つ目の柱は公益財団法人として、また北九州市外郭団体として運営の透明性・公正性を強化するとともに、法令順守に努めます。

KITA創設の1980年から40年近い活動の中で、165か国から9,000人以上の研修生を受け入れ開発途上国に対する技術協力と北九州地域の国際化に貢献をしてきました。新しい令和の時代でも創設以来の基本理念を守り、国際貢献と地域発展を目指して参る所存です。今後とも皆様方のさらなるご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

2018年度／2019年度 理事会・評議員会開催

1. 2018年度

(1) 第2回通常理事会

① 主要議題：2019年度事業計画並びに収支予算書等の承認

② 日 時：2019年3月7日(木) 12:30～14:25

③ 場 所：千草ホテル

(2) 臨時評議員会

① 主要議題：2019年度事業計画並びに収支予算書等の承認、評議員・理事選任

② 日 時：2019年3月20日(水) 12:30～14:20

③ 場 所：西日本工業倶楽部

② 日 時：2019年5月29日(水) 12:30～14:25

③ 場 所：千草ホテル

(2) 定時評議員会

① 主要議題：2018年度事業報告並びに決算報告の承認
評議員、監事、理事の選任

② 日 時：2019年6月13日(木) 17:00～17:50

③ 場 所：西日本工業倶楽部

(3) 第1回臨時理事会

① 主要議題：代表理事並びに業務執行理事の選定について

② 日 時：2019年6月13日(木) 17:55～18:05

③ 場 所：西日本工業倶楽部

2. 2019年度

(1) 第1回通常理事会

① 主要議題：2018年度事業報告並びに決算報告の承認
令和元年度定時評議員会招集の決定について

I. KITA中長期指針

1. KITA財産づくり

2. 「KITAらしさ」と「北九州立地の強み」追求

II. 2018年度事業報告

下記3つの事業方針を推進したが、研修事業はJICA資金ショート問題を背景とした事業収入の伸び悩み、及び技術協力事業は大型2案件の翌年度へのずれ込みにより残念ながら経常増減額(評価損益調整前)は850万円の赤字となった。

1. KITAブランド実現に向けた事業力強化・充実

- (1) 研修ブランド・現地ニーズ把握からアウトカムフォローまでの確実な遂行
(2) 技術協力ブランド・公益目的事業継続と北九州中小企業のグローバル展開

(2) システムインフラの有効活用促進と機能充実

3. 公益財団法人運営の確立・透明性・公正性及び情報公開の徹底

- (1) 保護情報の厳守と情報公開の徹底
(2) 内閣府、北九州市の外部監査対応関連ドキュメント整備
(3) 公益財団法人としての日常マナーの確立

2. 事業運営効率化の一層の推進

- (1) 組織・業務分担の明確化と組織間連携の強化

III. 2019年度事業計画

JICA資金ショート問題の影響は2019年度も続き、KITAのマスタープラン(事業構造改革の必要性和と取組み)ローリングは当面凍結せざるを得ない状況となった。2019年度は柱である研修事業ではフォローアップ事業の具体化、技術協力事業では国際協力・技術協力の推進を更に積極的に進めることとした。KITAの総力を挙げて下記のテーマに取り組むことにより、約80万円ではあるが、黒字予算を組むことができた。

1. KITAブランド実現に向けた事業力強化・充実

- (1) 研修ブランド・現地ニーズ把握からアウトカムフォローまでの確実な遂行
① 研修のさらなる充実
② 新たな研修コース受注に向けた仕組みの構築
(2) 技術協力ブランド・市内に蓄積された技術・ノウハウを活かした海外技術協力及び市内企業の海外展開支援
① 国際協力・技術協力の推進
② 市内企業の海外ビジネス展開に対する積極支援
③ 北九州メンテナンス技術研究会活動の活性化・事業拡大

2. 事業運営効率化の一層の推進

- (1) 組織・業務分担の明確化と組織間連携の強化
(2) システムインフラの有効活用促進と機能充実

3. 公益財団法人運営の確立・透明性・公正性及び情報公開の徹底

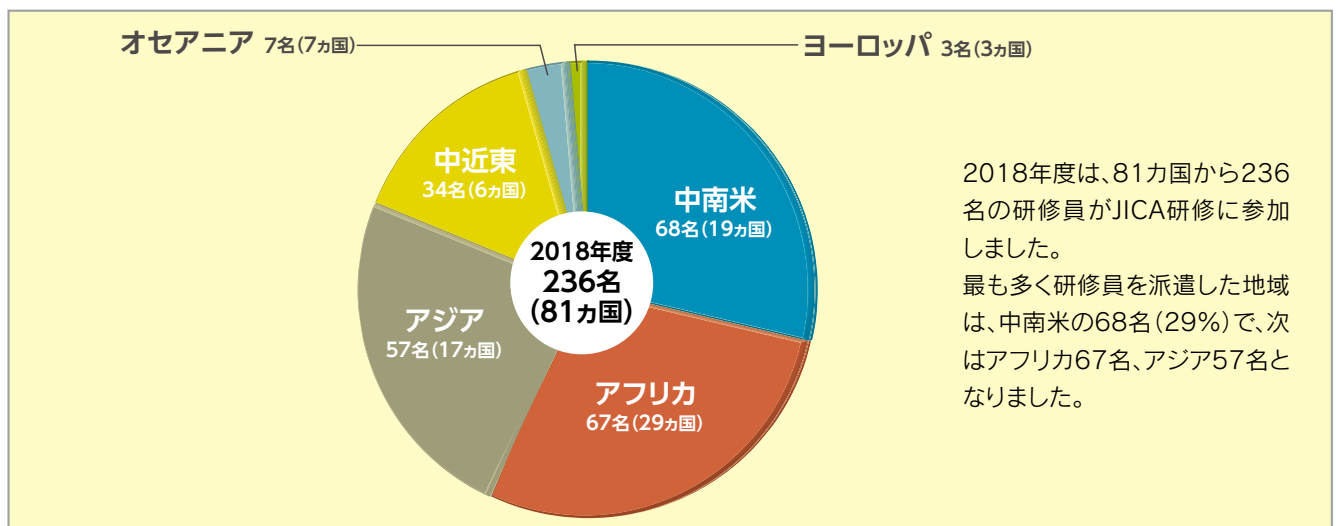
- (1) 保護情報の厳守と情報公開の徹底
(2) 内閣府、北九州市の外部監査対応関連ドキュメント整備
(3) 公益財団法人としての日常マナーの確立

2018年度 JICA受入れ研修コース実績

[KITA研修期間]

№	分類	コース名	区 分 形 態	研修員 人 数	コース リーダー	2018年						2019年					
						4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1	I 環境管理	廃棄物管理技術(応用・技術編)(A)	集団研修	5	指輪 勤												
2		廃棄物管理技術(応用・技術編)(B)	集団研修	6	原口清史												
3		コンポスト事業運営(A)	集団研修	7	山下敏郎												
4		コンポスト事業運営(B)	集団研修	6	指輪 勤												
5		イラク産業環境対策における能力開発	国別研修	8	粉 康則												
1	II 水資源・処理	下水道システム維持管理(B)	集団研修	8	末田元												
2		下水道システム維持管理(D)ベトナム	集団研修	5	永峰 勉												
3		水環境行政	集団研修	4	貴戸 東												
4		ベトナム:下水道経営研修1	国別研修	7	緒方信一												
5		アフガニスタン:統合水資源管理	国別研修	7	緒方信一												
6		分散型汚水処理システム導入・普及	集団研修	6	原口清史												
1	III 生産技術・地場産業活性化	中南米:中小企業・地場産業活性化(A)	地域別研修	7	河崎克彦												
2		中南米:中小企業・地場産業活性化(B)	地域別研修	7	北村 隆												
3		輸出振興マーケティング戦略(B)中東・北アフリカ	集団研修	5	中島康紀												
4		輸出振興マーケティング戦略(C)中南米	集団研修	8	井生幸人												
5		職業訓練の運営・管理と質的強化(C)	集団研修	7	有竹岩夫												
6		日本のモノづくり現場のノウハウ (A)	集団研修	6	鳥飼久敏												
7		ブラジル:日本のモノづくり現場のノウハウ(B)	国別研修	7	鳥飼久敏												
8		実践的電気・電子技術者育成	集団研修	4	植山高次												
9		起業家育成・中小企業活性化(A)アフリカ地域	地域別研修	6	中島康紀												
10		起業家育成・中小企業活性化(B)アフリカ地域	地域別研修	8	北村 隆												
11		輸出振興/マーケティング戦略	日系研修	4	三木義男												
12		タンザニア:品質生産性向上による製造業企業強化研修	国別研修	11	有竹岩夫												
1	IV 省・新エネルギー	エネルギーの高効率利用と省エネの推進(A)	集団研修	7	川口健二												
2		エネルギーの高効率利用と省エネの推進(B)	集団研修	7	緒方 勲												
3		エネルギーの高効率利用と省エネの推進(C)	集団研修	5	植山高次												
4		再生可能エネルギー導入計画(A)	集団研修	7	藤井岱輔												
5		再生可能エネルギー導入計画(B)	集団研修	7	植山高次												
6		高効率クリーン火力発電の推進	集団研修	6	緒方 勲												
7		マレーシア:再生可能エネルギー	青年研修	11	窪田琢也												
8		アフリカ:再生可能エネルギー	青年研修	9	窪田琢也												
9		掘削マネージメント	集団研修	4	高崎義則												
1	V 都市開発	食品安全行政	集団研修	8	中原幸治												
2		持続的な都市開発のための都市経営(A)	集団研修	9	井生幸人												
3		持続的な都市開発のための都市経営(B)	集団研修	7	高崎義則												

2018年度に参加したJICA受け入れ研修員数と国数



研修員の新たな実行の一步を祈念して

「エネルギーの高効率化と省エネの推進(B)」コース

コースリーダー 緒方 勲

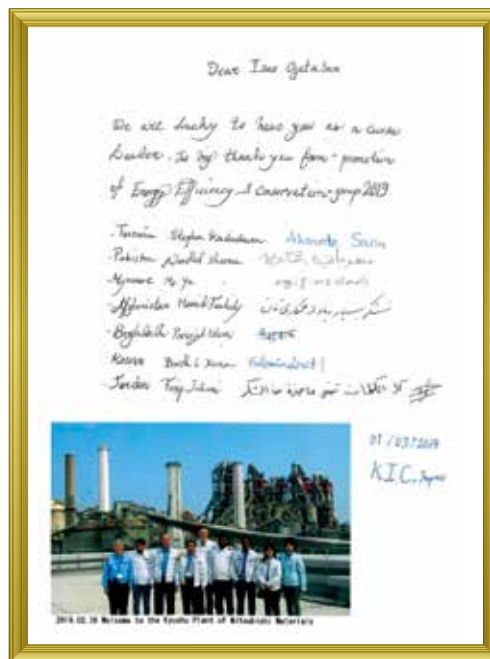
当コースは、2017年度に省エネに関する3つの研修コースが統合され、「エネルギーの高効率利用と省エネの推進(B)」として、新たにスタートした研修です。

本年度(2018年度)のコースは、アフガニスタン、バングラデシュ、ヨルダン、コソボ、ミャンマー、パキスタン、タンザニアの7か国の研修員(女性1人と男性6名)の構成で、コースリーダーとコーディネーターを加え9名の陣容でスタートしました。

46日間も一緒に生活をすれば色々な事に遭遇しました。研修旅行先のホテルで歯痛が酷くなり研修旅行を切り上げ九州の病院で治療を受けたHさん、風邪で声が出なくなりホテルで治療のため1日研修を欠席したTさん、国間の感情のもつれを惹きさせたP-Nさん、建国記念日に国家を承認してくれた日本への感謝とこのことで写真付きメールを送信してくれたBさん等、懐かしい思い出がありました。

しかし、勉強に取り組む意欲は旺盛で、各人が自分の得意とする分野では質問を繰り返すのは当然とし、研修員同士相互に啓蒙しあう姿には感心しました。コースリーダーとして研修員へ送った“はなむけ”の言葉は、“当コースで省エネに関して日本で最高の講義を学んだはずです。帰国後はアクションプラン(AP)の一つでいいので即実行して下さい。そうすれば、また新しい視点が開けてきます”

添付の写真は、研修員からプレゼントしてくれた寄せ書きです。AP作成で忙しい中準備してくれた写真を見ながら、コースリーダー冥利に尽きるとの思いです。ありがとう!



研修員から贈呈された額縁入りの寄せ書き

＝ 閉講式 研修員スピーチ ＝



- 閉講式
2019年3月1日
- 研修受入れ期間
2019/1/18～3/01
- 代表スピーチ
ハミッドさん
(アフガニスタンから参加)

閉講式で研修員を代表して、ご列席の皆様の前に立つことができ大変光栄です。この閉講式が開催されたことは、研修が成功裏に完遂されたことでありコースに携わられたすべての皆様にお喜び申し上げます。この研修は、エネルギー効率と省エネルギーの分野で、日本の新しい方策、知識、技術を学ぶ絶好の機会を私たちに与えてくれました。また、研修期間中、私たち研修員は、各企業を訪問し実践的な仕事について多くのことを学びました。このJICA研修で得た知識・技術は、帰国後のアクションプラン遂行に役立つ十分な内容でした。

素晴らしい“おもてなし”と有益な“研修”を実行されたJICAとKITAの関係者に心から感謝の意を表したいと思います。私たちがJICA九州へ到着した初日は、研修コースの7週間を無事に過ごすことができるか、不安な

心境に陥っていました。私たちは我が家から離れ、私たちの家族や愛する人からも離れていましたが、皆様が私たちにとって素晴らしい家族となりました。JICA九州スタッフに心よりお礼を申し上げます。

私のスピーチは、日本のことわざ「一期一会」「一生に一度の出会い」で締めくくりたいと思います。まさに、遠く異なる国々から派遣された研修員は、ここJICA九州で貴重な出会いができ将来のエネルギー効率の分野で共に協力しあう強い“絆”で結ばれることができました。もう一度、私たちのグループを代表して、お礼申し上げます。

ありがとうございました。



研修コースの閉講式

カントリーブランドの確立に向けて

「先進国市場を対象にした輸出振興/マーケティング戦略(B)」コース

コースリーダー 中島 康紀

このコースも早いもので、今回が4回目となります。従来、Bコースは東アフリカ主体の構成でしたが、今回は対象が中東・マグレブ地区に変更となり、イラク、ヨルダン、モロッコの3カ国から、5名の研修員が参加という少数精鋭集団での研修でした。

従来の東アフリカ諸国は農作物・食品が主でしたが、今回参加国では、軽工業も盛んでITもある程度進んでいることにより、それにマッチするよう科目を一部アレンジしました。具体的には、①「何を作るか」だけでなく「いかに作るか」についても学ぶ ②ウェブマーケティングやeコマースの講座の新設 ③最終商品の価値を左右するパッケージの重要性を知るといったことです。概ね、この狙いは的を射ていたようで研修員の課題解決に役立ち、輸出商品の具現化するアクションプランに結びつけることが、できたと思われまふ。

このコースを通じて学んで欲しかったことは、良いもの(当然顧客にとって良いものであってサプライヤーにとつてではありません)を作るのは大前提ですが、それだけでは売れる商品にはならないこと、そこにブランドが伴っ

てこそ、初めて売れるチャンピオン商品となることです。ブランド開発がさらに進むと地域、国とブランドのイメージが広がっていきます。研修員の皆さんの活躍で、参加国の名前を聞けばすぐ商品が思い浮かぶような素晴らしいチャンピオン商品が、日本だけでなく世界各国で目にする日が来ることを期待しています。



パッケージデザインを見ながら講師と議論



土産菓子「めんべい」の工場見学

安全な食品の生産・製造を目指して

「食品安全行政」コース

コースリーダー 中原 幸治

この研修コースがJICA九州で開催されて、すでに13回目を迎えました。2018年度は、インドネシア、中国、レバノン、ミャンマー、マレーシア、ナイジェリア、ペルー、トンガの8カ国8名の研修員を迎えて研修が行われました。

当研修は、毎回、応募者の多くが農林水産あるいは衛生部門に所属している研修員となっています。このため、関心の高い科目、低い科目が出てきますが、2018年度の研修員は、すべての科目を自らの課題解決のため、積極的に挑戦し真剣に取り組んでいた姿が、特に印象深く残っています。

研修では、日本の食品安全の法体系、行政組織、業界の取り組み等について、講義、見学、実習を交えて行っていますが、研修員の参考になる分野は多岐に渡り、我々が予期しない事柄にも関心が向いていました。

日本の道路、公園等、公共の場所に“ごみ”が散乱していない風景に、研修員が異口同音に感心していました。「学校給食の衛生管理」での研修(学校訪問)では、毎回、小学校での掃除の時間に遭遇します。研修員は、小さな小学生が、けなげに掃除に励んでいる現場を見るにつけ、日

本の安全な食品、衛生水準の高さが、幼児期からの目に見えない教育が根底にあるのではないかと、との強い印象を持ち、帰国後のアクションプランに衛生教育の重要性を再認識する研修員が多く見られます。日本で学んだ幅広い知識、情報を活用して、それぞれの国の課題解決に繋げてもらいたいと切に願っています。



北九州中央卸売市場でせり売りや市場内の衛生状況を視察



竹末小学校での交流会
マレーシアの学校給食について
研修員から話を聞いた

■ チュニジア

コースリーダー 末田 元

帰国研修員 ヒシエムさん (Mr. SANDLY HICHEM)

研修コース 下水道システム維持管理 (B)

研修時期 2018/1/12～2018/2/23

ヒシエムさんは、工場排水を受け入れている下水処理場に勤務しています。下水道への間接続、規制を守らない工場、オイル・グリースによる管路閉塞問題等で対策に苦慮しているようでした。「振り返りの時間」に工場廃水を下水処理場につなぎ込むことの問題点を中心に情報提供を行いました。アクションプランの発表では、汚染企業のリスト作成のために簡易水質試験方法のPACK TESTの実施、下水道施設に与える影響等で事業所監視優先度を考えるなど、研修で得た知識を十分に利用していました。

今回のヒシエムさんのレポートを拝見すると、多くの工場立ち入り検査を実施している様子が伺われました。チーズ製造工場やセメント工場などは、アクションプランでも述べられていた負荷量の大きい工場を優先的に検査する方針の表れかもしれません。工場に排水基準を守らせることは至難の業です。特に、下水管に接続している場合は、排水の状況が見えなくなるため、指導はより一層困難になります。このため、組織全体で立ち向かう姿勢が、是非とも必要です。規制がしっかりしてくると、下水道施設の維持管理が容易になり、ひいては水環境改善や保全に寄与することになります。



顕微鏡で活性汚泥中の微生物を観察

■ チリ

コースリーダー 三木 義男

帰国研修員 真由美さん (エイホ常川真由美イグナシア)

研修コース 和食ビジネス振興

研修時期 2017/11/13～2017/11/29

2017年度「和食ビジネス振興」コースに参加したチリのエイホ真由美さんから自宅パソコンへeメールが届き、「自分の和菓子店を開店した」との朗報が舞い込んできました。彼女のアクションプランでは、「2020年に自分の和菓子店を開業する」としていたので、前倒しの実施でもあり、嬉しい気持ちから即刻、お祝いのメールを送信しました。2017年11月に実施した日系研修「和食ビジネス振興」コースは、南米5か国(アルゼンチン、コロンビア、チリ、ブラジル、ペルー)から6名の研修員が参加しました。

エイホ真由美さんは、紅一点で他の研修員とも和気藹々で非常に研修を楽しんでいました。特に、和菓子に関しては大学卒業後、京都の和菓子店で1年半の住み込み修行をしており、「和菓子の拡大」という明確な目標をもっていただたことで研修には大変熱心だったことを想い出します。今回送られてきた写真を拝見すると、自分の店の名前を「SAKUMU(作夢)」とし、自分の夢を実現したとの気持ちを表したネーミングと推察します。また、和菓子の「和」を意識して、店全体に和を基調としています。入口の暖簾は、富士山と鶴のデザイン、勿論、和菓子も繊細でカラフルであり彼女の細やかな和心を感じます。そして、彼女の笑顔には店を持った満足感が満ち溢れています。



新しく開店した自分の店の前で喜ぶ
真由美さん(写真左)

環境省環境調査研修所の2018FY研修実績

技術協力部 部長専門員 澤田 献

中央省庁の地方移転の一環として、3年前から、環境調査研修所の3コースが「環境首都」北九州市に移管され、その事務局機能をKITAが受け持っています。2018年度は、そのうち下記の2コースが行われ、全国の自治体から研修生が集まり、充実した研修を行いました。

1. 廃棄物・リサイクル専攻別研修

(2018/11/6～11/9の4日間) 40名

循環型社会の構築に向けて、廃棄物処理の変遷、環境省・北九州市・市民レベルでの取り組みおよびリサイクル産業の現状と今後について講義を受けると共に環境ミュージアム、エコタウンなど北九州市ならではの施設を見学しました。研修生同志の懇親も盛んでネットワークづくりにも貢献できたようです。

2. 国際環境協力基本研修

(2019/2/4～2/8の5日間) 22名

地球環境問題の解決には、国際的な環境協力が重要であり、国・地方公共団体などの主体的取り組みが求められています。今回、環境省、北九州市、JICAの関係者から講義を受け、また、IGES、KITA、楽しい㈱などが

ら事例を紹介していただきました。環境ミュージアム、エコタウンへの企業訪問に加えて、福岡県および北九州市の海外協力経験者を囲んでのディスカッションや北九州学術研究都市の留学生による各国の環境状況紹介など、北九州市ならではの研修を行いました。今年は両研修とも、研修で得た気付きや発見を漢字一文字で表す「一筆入魂」という企画を行いました。研修生には大変好評でした。



国際環境協力基本研修



廃棄物・リサイクル専攻別研修

JICA草の根プロジェクト「プノンペン都廃棄物管理改善事業」スタート

技術協力部 部長専門員 澤田 献

北九州市の姉妹都市であるカンボジア国の首都プノンペン都で、廃棄物管理に関するJICAの草の根技術協力事業が2019年1月からスタートしました。急速な都市化の進展により、プノンペン都では、ごみ処理能力及び管理レベルアップが喫緊の課題になっています。

今回のプロジェクトでは、ダンコール最終処分場の管理改善と、都心部を流れるトラベック水路という下水道のゴミ問題に対する住民啓発・環境教育の2つの柱を中心に3年間の計画で取り組むことになりました。メンバーは、提案元の北九州市アジア低炭素化センターをはじめ、教育委員会、北九州市環境整備協会、ひびき灘開発㈱及び実施団体であるKITAといった「オール北九州」の体制になっています。(一部エックス都市研究所にも協力いただいています)

現在の処分場は、あと2年ほどで満杯になると予想されており、浸出水、地下水などの基本的データを採取し、改善策と一緒に検討する予定です。また、住民啓発につ

いては、水路周辺の5地域の方々との、まさに「草の根の対話」を通して、自分たちで改善のアイデアを出し、一歩ずつ実行していくことが望まれています。次世代の担い手である小学生への環境教育についても、プノンペン都側の意向を尊重しつつ、モデル授業を実施したいと考えています。

下水道のゴミ問題について
住民との集会



都心部を流れる
トラベック水路の
ゴミ問題

マレーシア国キャメロンハイランドにおける

食品系廃棄物の堆肥化およびリサイクル・ループの構築

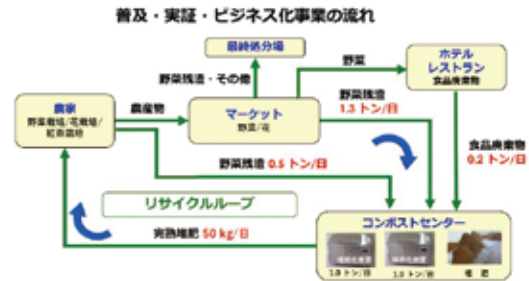
技術協力部 部長専門員 竹内 真介

マレーシア国のキャメロンハイランドは、標高1,500mを超える高原地帯で自然が残る観光地であるとともに、冷涼な気候を活かした野菜や果物の栽培が盛んな地域です。しかしながら、野菜残渣や食品廃棄物（以下食品系廃棄物）は、廃棄物中の水分が多いため現地にある焼却工場では焼却処理ができず、200km程離れた最終処分場へ運ばざるを得ないなど、深刻な環境問題を抱えています。

このような背景から、楽しい㈱は、北九州市およびKITAの協力のもと、マレーシア国キャメロンハイランドにおいて食品系廃棄物の堆肥化を推進しています。①マーケットやホテルから出る日量2トンの食品系廃棄物を分別収集しコンポストセンターで堆肥化を行い、②出来上がった堆肥を農家で使用し野菜を栽培する。これらのリサイクル・ループを構築するために「マレーシア国食品系廃棄物の堆肥化及びリサイクル・ループ構築に係る案件化調査事業」を、2017年11月～2019年2月に実施しました。

その後、マレーシア国キャメロンハイランドでの堆肥化事業をビジネスとして取り組む「普及・実証・ビジネス化事業」が採択されましたので、引き続き、楽しい㈱、北九州市、KITAは、マーケットやホテルから出る日量2トンの食品系廃棄物の堆肥化事業の実証事業を2019年

7月より約3年間をかけて実施します。



「普及・実証・ビジネス化事業」のフロー図



キャメロンハイランドの農園
これらの農園から出る野菜残渣を原料に堆肥を作る

「人を大切にする経営」などを学ぶ

ハイフォン経営塾（第3期）の北九州研修

技術協力部 部長専門員 宮田 利勝

2019年5月21～25日、ベトナム北部ハイフォン市の企業経営者らの北九州研修が実施され、KITAはそのサポートを行いました。本研修はVJCC（ベトナム日本人材協力インスティテュート、本部ハノイ市）が主催する経営塾で、ベトナムの産業界をリードする経営人材の育成を目的としており、日本での企業経営の実際を体験するものです。

今回第3期の参加塾生は19社24名の若手を中心とした経営者や幹部たち。研修課題は ①経営理念の実践、②組織力強化と人材育成、③生産・品質管理の高度化、④国際経営力強化など日本企業でも日々苦闘しているテーマばかりでしたが、この研修の中で、経営の基盤は「人」であり「人を大切にする経営」が肝要と学んだようでした。

今回は特にビジネスイベント「展示交流会＆商談会in北九州」を開催。塾生企業は自社のPRポスターや商品サンプルを展示し、その前での企業交流、さらには商談コーナーでの商談と盛んな交流が繰り広げられました。

加えて、北九州市とハイフォン市が姉妹都市であることから市長表敬訪問を行いました。表敬訪問の丁度2週間前に市長自らハイフォン市及びVJCC本部を訪問したとのことで大いに盛り上がり、両市の絆がより強くなった印象でした。

来年5月には第4期生の北九州研修も予定されております。

HACCPによる食品の品質管理を学ぶ
（㈱七尾製菓様にて）



ビジネスイベント「展示交流会＆商談会in北九州」
後方では展示交流会、手前では商談会が活発に進められた。



北九州市市長表敬訪問 北橋市長を囲んで

設備保全技術者の育成・交流の場「北九州メンテナンス技術研究会 (KME)」の活動紹介

KME事務局 森 章

北九州メンテナンス技術研究会は、(公財)北九州国際技術協力協会の公益事業の一つとして、北九州市近郊の会社を中心に48社が会員として参加し、運営されています。主としてセミナーや部会活動を通じ、各社の設備保全技術者の育成・交流の場として活用されています。

下表に2018年度に実施した技術セミナーを示しており、延べ126名(前年度は118名)が受講しました。中でも今年度は「表面改質技術セミナー」を新たに開設し、好評を得ました。このセミナーは保全技術者・設備技術者にとって、改良保全・保全性設計を行う上での必須技術と言

え、今後とも継続実施していく予定です。

予知保全研究部会は15社21名が集まり、年度に亘る交流を実施しました。講師陣として安西敏雄講師に加え新たに前川健二講師を迎え、隔月計6回、活動を行いました。

また会員総会を7月に北九州イノベーションギャラリー(KIGS)のプレゼンテーションスタジオにて実施し、併せて映画上演会・講演会をKIGSとの共催にて行いました。

詳しくはKITAホームページ内「北九州メンテナンス技術研究会」欄をご覧ください。

KMEセミナー／2018年度 活動実績

セミナー名	指導講師	開催月/日数	会社数	受講者数
疲労強度	佐賀大学 名誉教授 西田 新一	5月/4日間	10	16
腐食・防食	日鉄住金環境(株) 近藤 純平	6月/1日間	7	10
溶接技術	九州工業大学 名誉教授 加藤 光昭 九州工業大学大学院 名誉教授 安西 敏雄	7月/2日間	11	21
トライボロジー	早稲田大学 名誉教授 松本 将	8月/2日間	5	8
制御技術	(株)安川電機 高瀬 善康、高田 徳幸	9月/1.5日間	13	13
設備診断技術(電気編)	工学博士 植山 高次	10月/2日間	7	15
実践的油圧技術	新日鐵住金(株)OB 城戸 嗣郎	11月/2日間	11	21
設備診断技術(機械編)	情報工学博士 前川 健二	1月/2日間	7	8
表面改質技術	日鉄住金ハードフェーシング(株) 林 直之 他 吉川工業(株) 芝本 茂 他	2月/2日間	8	14
受講者数合計				126

「到津の森公園ツアーを実施しました」

事務局 事務課長 高井 辰彦

昨年7月7日、再生可能エネルギー導入計画ー太陽光発電を例としてー(A)コースの研修員を対象に、北九州市立大学FIVA(*1)メンバーの企画による「到津の森公園ツアー」を実施しました。

前日が西日本豪雨で大雨特別警報が発令され、開催が危ぶまれましたが、朝には警報が解除され、予定通り開催することができました。曇り空で暑さが和らぎ、かつ前日の影響が土曜日にも関わらず来客が少なく、最初の学生によるガイドスもスムーズに行うことができました。

当日は公園内に七夕コーナーが設置されており、全員が思い思いに短冊に願い事を書き、竹に飾り付けました。他の入園者は、アラビア語やミャンマー語等で書かれた短冊を目にして、不思議に思ったかもしれません。

その後は、3班に分かれ班ごとに自由に行動しましたが、どこも混雑することなく、園内を存分に見て廻ることができました。研修員それぞれの母国にも動物園はあると思いますが、こじんまりとして動物と触れ合いやすい到津の森公園ではリラックスできるようで、思いのままに餌やり体験をしたり、オウムと会話したりして、陽気かつ無邪気に楽しんでいました。

最後に集合写真を撮影し、約3時間のイベントを滞りな

く終了することができました。

学生の中には、参加予定でありながら、あいにく交通機関の影響で加われなかったメンバーもおられましたが、この企画を立案していただいた学生の皆さんに、この場をお借りして感謝申し上げます。

*1 FIVA

北九州市立大学 地域共生教育センター 国際交流プロジェクト
「歩いて、遊んで、学んで。北九州で国際交流」をスローガンに、北九州を訪れる外国人の方々との交流を通して、日本文化や北九州の歴史を知ること、北九州に親しみを持ってもらえるようなイベントの企画・運営を行っています。



到津の森公園にて



近況だより

KITAでご活躍されたOBの皆様からの便りです。
今回は、研修部長として長く活躍されました上野さんからの便りです。

・上野 正勝さん 元副理事長 (KITA在籍：2006年～2017年)

KITAでの経験を基礎に、人生を楽しんでいます。

参与 上野 正勝

毎日出勤する生活を卒業し、“自由人(?)”になって2年が経過しました。世間に言われている“自由人にとって大切なこと”つまり、「キョウヨウ(今日、用がある)」ことと「キョウイク(今日、行くところがある)」ことの重要性を実感する毎日を過ごしています。

今の自分にとって、この「キョウヨウ・キョウイク」の場は毎週参加する卓球であり月に2回ほど出席するZUMBAです。ZUMBAは音楽に合わせて踊る体操で、原則毎週水曜日18時からJICAの体育館で開催されています。後期高齢者にとっては若干ハードな運動ですが、時間の合間に旧知のJICAの皆さんや初対面の研修員と交流が出来るので、新鮮な気分になれます。



JICA九州職員や研修員の皆さんと一緒に“ZUMBA”を楽しむ

卓球は今から10数年前に始めたスポーツですが、KITA時代にはサボってばかりしていました。自由人になって週2～3回参加しています。技の向上より、参加者との会話を楽しんでいます。

不定期ですが、市やJICAの図書館にもよく行きます。ここでは人との出会いはありませんが、KITA時代に研修員に向かって述べた自分の意見の妥当性の検証が出来ます。例えば、人類が当面する課題(資源の枯渇や環境問題)解決のために必要な行動は3R(①Rational Use of Natural Resources, ②Renewable Energy, ③Responsibility for



JICA九州図書室にて

the Next Generation)であることを熱く訴えてきました。増えた自由時間のおかげで、産業革命や宗教改革や経済発展の歴史を幅広く学ぶことができ、また昨今のSDGs(持続可能な開発目標)への関心の高まりもあり、自分が語ったこの3R(Reduce, Reuse, Recycleを拡大した3R)はJICA研修にふさわしい内容であった自信を深めることが出来ました。

自由人になって、住んでいるマンションの理事会の仕事が回ってきました。おかげでマンションの人達との交流も始まりました。これまで慣れ親しんだ職位や権限という座標軸から、全く異なる座標系への転換でしたので慣れるのに時間がかかりました。2年経ち、幸か不幸か今年度から「理事長」という重責へ昇進(?)です。自分の能力・経験から考えると分不相応な仕事と分かっていますが、自由人なら誰でも経験するこのフラットな人間関係の中で少しでも役に立つ仕事ができれば良いなと思っています。

ほとんどの高齢者の望みは「ピン・ピン・コロリ」だそうです。その実現ためには、4つの行動：①話 ②食 ③動 ④睡が必要と言われています。この内、①「話」は相手がないと出来ません。先のZUMBA、卓球にこの理事長の仕事が加わり、「話」の機会が増えたと考えればありがたいことです。

KITAの仕事は確実に視野を広げてくれます。皆様のご活躍を祈ります。

KITA人事異動(2018年1月1日～2018年6月30日)

退任

事務局調整課長 河野 賢司(2019年3月31日付)
研修部コースリーダー 河崎 克彦(2019年3月31日付)

事務局長支援専門員 藤原 直捷(2019年3月31日付)
技術協力部コースリーダー 北田 弘(2019年3月31日付)

新任

事務局調整課長 安達 一三(2019年4月 1日付)

研修部コースリーダー 浜田 秀利(2019年4月 1日付)



下水道維持管理研修について Part I (概要)

コースリーダー 末田 元

現在JICA九州からKITAが受託している研修の一つに、JICA集团研修「下水道システム維持管理(B)」があります。平成20年度に第一回が実施され平成30年度で11回の実施になりました。この研修について少し紹介いたします。



いてつく寒さの中、下水処理場の見学

この研修は、当初「下水道維持管理システムと排水処理技術(B)」という名称で平成20年度に第一回が実施されました。研修期間は8週間でスタートしましたが、29年度から7週間に短縮となり現在に至っています。

当研修の背景は、「開発途上国でも下水道施設の建設が始められてきており、それらの施設の適正な維持管理が求められています。しかし、それらを維持管理する技術者が少なく、幅広い知識と技術を持った技術者の確保が急務となる。」というものです。このように本研修の目的は下水道施設維持管理技術者の育成ですが、本研修のジェネラルインフォrmーション(GI)では、学ぶ内容として、下水道に関する、法律、経営・広報、設計、維持管理、工場排水規制、と下水道システムに関する全般となっています。

維持管理関係以外の研修内容では、水環境と下水道事業の関わり、下水道の基本設計、管渠設計、小規模処理場設計の概要、浄化槽概論などを取り込んでいますが、それらの研修は各々3時間と短く、基礎の基礎を勉強してもらうにとどまっています。7週間(49日間)の研修ですが、研修員に対する事務手続きに要する日数、土日、アクションプラン作成に要する日数などを差し引くと、下水道事業そのものに関する研修の実研修日は23.5日と7週間研修の半分以下の非常に短い研修となっています。しかし、GIに記された研修内容(下水道に関する幅広い内容を提供)を組み込むことが必要であるため、専門的な内容を深く掘り下げた講義はあまりなく、下水道に関する基本的なことを学んでもらうカリキュラムになっています。

私が担当した平成23年度から平成30年度までの8回

の研修では、29か国から合計67名の研修員が参加しました。研修応募者総数は104名で、一研修当たりの応募者数は平均で13人と多く、このコースの人気の高いことが分かりますが、下水道事業の取組はまだ先のこととしている国からの参加者も多くいます。これらの参加者の国、地域では、水道事業が優先されているところが多く、下水道事業に取り組むにはまだまだ先のようなようです。このため、研修を受けた後の知識の活用が帰国した後十分なされるのかという懸念があります。特に、最近の研修ではパワーポイント(PPT)を使って講義をすることが多く、それらを持ち帰った研修員が数年後の必要になった時に読み直して見て研修当時の内容を思い出せるか、という心配があります。



水質分析実習で指導を受ける研修員

人気のあるコースですが、このように大きな問題を抱えているようにも思われます。次回のパートIIについては、研修内容をより深く理解してもらうためにこの研修で取っている方法「振り返りの時間」について紹介します。



世界各国から参加した研修員の分布図